

明治から昭和初期の北海道における博物館とアイヌ民族

—その設立経緯と資料収集をめぐる—

城 石 梨 奈*

The museums in Hokkaido and the Ainu in Meiji to early Showa era:

the establishment and the collection

SHIROISHI Rina

abstract

The first museum in Hokkaido was established by Hokkaido Development Commission in 1877. The museums made by the Commission were transferred its management to the other ministries and schools some times afterwards, and as the time passed by and the 'assimilation policy' for the Ainu went on, its intention to make the Ainu collection and what they collected and its categorization which the artefacts was contained changed. The Ainu collection and the Ainu themselves were 'exhibited' at the expositions in Japan and overseas during the Meiji to Taisho period, and a museum where the Ainu show their cultures and represent themselves dawned in 1916. These museums' development had been correlated with the relationships between the Ainu, Japanese and the foreigners. Its history shows the fact that they had always been under the conflict over the preservation of their cultures and representation of themselves.

Keywords: Ainu, museum, Hokkaido Development Commission, exposition, anthropology

1 はじめに

日本において、先住民アイヌに関わる資料は明治期以前から国内外の人間によって「収集」され、ときにはそれらが陳列・展示されてきた。博物館で扱う資料は時代を経るに連れて変化してきたが、なかでも民族資料を扱うことについては、現実社会に共に生きている人間を表象する作業が必然的に伴う。アイヌ民族と和人、そしてとりわけ欧米圏からの「外国人」の相互の関わりの中で、何のために設立された博物館において、どのような資料が集められるのかは、その時代の政治社会的な要素と相互に影響し合っていると考える。これは博物館とは何なのかという根本的な議論にも及ぶ問題ではあるが、本稿では照準を明治期から昭和初期の北海道に合わせ、近代的博物館の成立以降、それらの機関とそこで取り扱われたアイヌ民族資料がどのような変遷を遂げてきたのかをまず概観する。なお、時代区分をこのように設定するのは、昭和初期が北海道において北海道アイヌ協会の設立に見られるような民族運動の全道的な高まり、新しい主体による博物館の設置などがあり、アイヌ民族と博物館の関係史における一つの大きな転換点であることと見ることができるためである。その前史にあたるこの期間に設立された道内の博物館のなかで、アイヌ民族資料を扱ってきた館には、開設年の古い順に、開拓使札幌仮

キーワード：アイヌ、博物館、開拓使、博覧会、人類学

*平成18年度生 人間発達科学専攻

博物館、開拓使函館仮博物館、川村アイヌ記念館、北海道拓殖館がある。

本研究は、アイヌ史および博物館史に関わるテーマを扱う。アイヌ民族資料を所蔵する博物館については個別の館の歴史や資料に関して詳細に論じた先行研究は見られるが、社会史との関わりの中で複数の博物館を網羅的に扱った研究は十分に為されてはいない。博物館の営みはそれぞれで完結するものではなく、人間集団同士の関わりを含めた社会の要請、博物館相互の関係によって変化するものであろう。したがって、ここでは特に博物館という装置およびそこに収められた資料に着目して、それを通じて見えてくるまなざしの位相の変化を他文化の表象と自文化の表象という観点から考察してみたい。

以下、本稿では他者であるアイヌ民族を扱った館として開拓使設置の博物館、そしてアイヌ民族側が自文化を扱った館として川村アイヌ博物館について検討したい。なお、史的資料の引用部分では、現在では適切ではない用語や表現が用いられている箇所があること、仮名遣いを読み易いように筆者が一部書き換えていることを断っておく。

2 開拓使設置の博物館—他文化の表象—

2.1 開拓使設置の博物館の沿革とその目的

日本における近代的博物館の萌芽期は、国内外において催された博覧会への出品のための資料収集が盛んに行われた明治初期にあたる。博覧会出品のために収集された資料をそのまま博覧会後も展示し、人々の娯楽や教育に供されることになったためである。そのような博物館萌芽期に、国内でも最古の歴史を持つ博物館の一つとして北海道の地に設立されたのが、開拓使札幌仮博物館、そして函館仮博物館である。

開拓使による資料の収集・公開施設として博物館が設置されたきっかけとされるのが、明治4（1871）年に「御雇教師頭取兼開拓使顧問」としてアメリカ合衆国より招聘された、農務局長ホーレス・ケプロン（H. Capron）の意見である。彼は同年8月に、開拓使に対して「今般北海道へ大学及び開拓使官署御建築相成候に付、（中略）教導の道を開くには文房（library）と博物院（museum）は欠くべからざる事は当然なり」¹と提言を行っている。この提言は、中央での博物館設立の動きとは別に、北海道開拓政策という観点から博物館設立の意見が存在したことを示している点で重要である（関、1975, 1990）。

まず本節では、開拓使設置施設について、関（1975, 1990, 1991）、千代（1979）、沖野（1999, 2000, 2001）、加藤（2008）らの記述をもとにその沿革とアイヌ民族資料の来歴や性質を概観する。

＜開拓使施設設置の前史＞

明治5（1872）年、オーストリア・ウィーンでの万国博覧会（明治6（1873）年。以下、ウィーン万博）への出品要請を受け、太政官正院に「澳国博覧会事務局」が設置される。博覧会事務局は、国内各地の産物の収集を開始した。その中で北海道産物の収集に当たったのが開拓使の北海道物産取調掛であり、収集された北海道産物は、ウィーン万博に出品されたほか、国内施設においても陳列された。

＜北海道物産縦観所・開拓使東京仮博物館の設置＞

ケプロンの提案した博物館設立が開拓使によって最初に実現したのは、明治8（1875）年、東京芝増上寺の開拓使東京事務所の仮学校跡に開設された北海道物産縦観所であった。この施設は開拓使東京出張所農業課（同年12月に勸業課と改称）の所管とされ、その設置目的については、『開拓使事業報告』に、「北海道の物産及開拓の参考に供すべき物品を展列し衆庶に縦覧せしむ」²とある。

北海道物産縦観所は、翌年には開拓使仮博物館と改称される。所管は、同じく勸業課（従来の農業課）であり、設置については次のように述べられている。「当使管下北海道産物の義は広く衆人の見聞に触れざる者有之候に付、専ら該動植鉱物の類其他有益物品を蒐集し、傍各国の物品をも取交え参考の為東京出張所構内へ陳列し、仮博物館と唱え内外人民へも縦観差許す筈に候」³。

明治14（1891）年に開拓使東京出張所が閉鎖されたことにより、東京仮博物館は閉場し、その陳列資料は博覧会事務局を通して上野公園地内博物館、札幌本庁（札幌仮博物館・札幌農学校）、函館支庁（函館仮博物館）に引き継がれた。

＜開拓使札幌仮博物場の設置＞

開拓使札幌仮博物場は、明治10（1877）年に札幌偕楽園内に作られ、開拓使札幌本庁物産局博物課が所管した。設置の目的は、「専ら北海全道の物品を蒐集し此に展覽して衆庶の縦観を許し、「博覧会一切の事務を掌る」ことであった⁴。資料が増加するに連れて陳列室が狭くなったために、明治15（1882）年に新たに札幌博物場として竣工する。同年、開拓使が廃止され、博物場は農商務省博物局が所管、翌16（1883）年には新たに設置された農商務省北海道事業管理局の札幌農業事務所に移管された。移管後、この博物場はその資料の分類を三部門、すなわち、「天産部」、「勸業部」、「史伝部」とし、その目的は以下のように設定された⁵。

札幌博物場は北海道所産の動植物及び之によって製出する工芸品を蒐集する事

開拓殖民の為裨益ある物品即農業漁業山林の諸産物及び其製品并供用物品及器具等を陳列し陸水に産増殖の模範たらしむる事

全道土人の曾て使用したるもの及び現今所用の物品を蒐集して史伝の考徴に供する事

農商務省という、勸業を担う行政機関の所管となった事実からもわかるが、「物品陳列の目的を更え、専ら拓殖上に裨益する勸業方面の物品と其製品に用いらるる器具類とを陳列することとせり」⁶という記述があり、殖産興業に資することが最も重視された。

明治17（1884）年、同博物場は同じく農商務省北海道事業管理局の管理下にあった札幌農学校に移管され、札幌農学校所属博物場となる。明治19（1886）年には札幌農学校博物室（博物標本陳列室）と合併し、とりわけ動物学関係の資料が充実しただけでなく、それまでの収集・陳列という機能に、研究機能が加わった（関、1975, 1991）。札幌農学校所管の博物場の目的は以下のように記されている。

本場は北海道所産の動植鉱物等の學術に裨益あるものを蒐集陳列し以て学生研究の便に供す

本場は學術研究の為め設置せしものと雖ども公衆の便を謀り（略）日水の二曜を以て開場縦覧の日となす⁷

その目的が教育・學術研究という方面に向かったことがわかる。なお、移管から9年後の明治26（1888）年には、札幌中島遊園地内に北海道海陸産物見本品陳列場が北海道庁によって開設された。これは、当時勸業政策の一つとして道庁が毎年開催していた北海道物産共進会の常設的な施設として開設されたものであり、今日でいう「産業博物館」の一種と言える（関、1975）。勸業的な性格を持つ資料はそちらに移され、博物場には自然史資料が残された。同陳列場の総則には、その目的として以下のように記されている。

第一條 本場は天産人工を問わず当道産出する所の物品及各般事業の参考となるべきものを広く蒐集出陳し広く公衆の縦覧に供し各業の進歩を謀るを以て要旨とす⁸

明治19（1886）年に札幌農学校が北海道庁の所属となり、明治28（1895）年に文部省直轄となった。その際に、博物場は博物館と改称、以後は一貫して同校の所管である。

なお、注目したい点として、①明治30（1897）年、②明治42（1909）年には、館の目的に以下のような文言が加わっている。

①本道所産の動、植、鉱及本道『アイヌ』人の製造に関する各種の諸器物を蒐集し以て学生研究上の用に供する⁹

②第一條 本館は北海道所産の天産物及人類学に関する標本を主とし尚ほ広く内外諸国の博物学に関する標本を蒐集陳列し学生研究上の用に供し併せて公衆の縦覧に供する所とす¹⁰

博物学や人類学という分野の研究と教育に資することとその成果の公開が、この博物館において主要な位置を占めてきていることを示している。

＜開拓使函館仮博物場の設置＞

開拓使函館仮博物場は、東京仮博物場、札幌仮博物場に続いて、明治12（1879）年、函館谷地頭公園内に設立され、開拓使函館支庁民事課勸業係が所管した。その設立目的は、函館支庁在勤の開拓権大書記官時任為基から開拓長官黒田清隆への「博物場新設の義伺」によると、「本使管内より産出する物産を第壹とし御国内自然の物産と人工製造諸物とを収集し一般人民の縦覧に供せば即ち開拓の進歩を補助し人民の智識を開達し、或は中外博覧会の挙あるに際し出品の順序を整調するの便を得べく、加之本使製造物品の見本を陳列し、内外人民購求の道を得せしめ度、且つ当港の如き内外人民輻湊の地に於ては自然要用のものと存候間至急新設候様」とある¹¹。北海道開拓の進歩を人々に周知させること、その後の博覧会のための出品資料の準備、産業育成や製品の宣伝、開

港地という地理的特質上、道内外の人々への物産公開という設置目的がうかがえる。開拓使仮博物館はこれで3カ所に設置されたわけだが、その設置の意図はどれも「産業の育成」や「開拓進歩を人々に周知させること」と「博覧会への出品業務の効率化」という点では共通している。

明治15（1882）年、開拓使の廃止に伴い、函館県勸業課農務係の所管となり、名称が函館県博物館と改称される。資料増加のため、明治17（1884）年に第二博物館が増設され、ここで民族資料が公開される。明治24・25年には北海道庁立函館商業学校附属商品陳列場となる。また、明治24（1891）年、道庁は道の主産業として水産業を重視したことから、公園内に水産陳列場を開設している。明治28（1895）年、庁立函館商業学校の廃止に伴い、陳列品の一部を庁立函館尋常中学校に引き継ぎ、水産陳列場と庁立函館商業学校附属商品陳列場の建物と所蔵品は函館区に払い下げられた。そして、もとの函館博物館を第一館、第二博物館を第二館、水産陳列場を第三館とし、函館水産陳列場として3館に統合・再編された。明治34（1901）年に第三館が廃止され、函館市産業課所管となっていた大正9（1920）年に第一館を水産館、第二館を先住民族館と改称している。

2.2 開拓使施設におけるアイヌ民族資料

本節では、開拓使設立の各施設においてアイヌ民族資料がどのように分類・整理されてきたのかについて記す。〈ウィーン万博出品資料・北海道物産縦観所・東京仮博物館〉

ウィーン万博出品のための資料にはアイヌ民族資料が含まれていたが、国内に残ったものは博覧会事務局から上野公園地内博物館に引き継がれた。北海道で収集する物品を博覧会事務局が指定した「北海道産物之大略」¹²によれば、アイヌ民族関係資料は「人造物之部」に多く含まれ、1,104点の北海道産物のなかに277点のアイヌ関係資料が見られる。これらは、博覧会における区分では『区外蝦夷朝鮮物品目録』に収められた。

北海道物産縦観所で陳列されていた資料は、「動物」、「植物」、「鉱物」、「製品」に分類された¹³。そのなかでアイヌ民族資料は「製品」として位置づけられ、「生絲」や、「器具」、「製油薬品澱粉」といった当時の開拓使官営工場の製品と同じカテゴリーに「土人衣類」12点、「土人靴類」8点が含まれている。これらについて、「全道の土人も追々開発其工事も方面に従い相異なり候に付、各地方当時専ら生出するものを相撰み土人の伎倆を推察するが為めの旨意。」¹⁴という記述が見られる。

東京仮博物館において収集・陳列されていた資料については、同様の4分類のうち、アイヌ民族資料が含まれる「製品」が「工業」と改められたが、その内容に変化はない。明治14（1881）年の閉鎖に伴い、アイヌ民族資料は函館博物館に移された。

〈開拓使札幌仮博物館〉

札幌仮博物館では、資料は「動物」、「植物」、「鉱石」、「古器物」、「水産」、「農産」、「製造」、「土木」、「土人」、「外国品」、「図書」の11部という、独自のカテゴリーに分類され、アイヌ民族資料は「土人部」に126種・251点を数え、全体の約9%を占めた（関、1991）。

〈農商務省所管札幌博物館〉

既述の通り、農商務省に移管された札幌博物館では、資料は「天産部」・「勸業部」・「史伝部」の三つに分類され、「天産部」は動植物、「勸業部」は水陸産加工物や製品類から成り、「史伝部」に写真・古器物・土人用具の3類が含まれている¹⁵。

〈札幌農学校博物館・東北帝国大学農科大学博物館〉

アイヌ民族資料は、主として札幌農学校博物館で扱われることとなった自然史資料のなかに含まれていた。資料の分類は、明治23（1890）年までは移管前と同様の3分類であるが、細目はより詳細になっている。明治18（1885）年11月時点で、アイヌ民族資料は「史伝部」のなかの「旧土人用具類」とされ、その数340点、全体のなかの割合は5.3%となった¹⁶。列品資料は動物、植物、人類学、鉱物及岩石の4標本類に大別され、そのうち人類学標本類は「アイヌ土俗品」と「北海道樺太先史時代遺物」から成る¹⁷。

沖野（1999, 2000, 2001）によれば、札幌農学校所属博物館から東北帝国大学農科大学博物館の時代のアイヌ民族資料の位置づけは、この博物館で資料を管理していた動物学者、八田三郎の札幌農学校教授着任（明治37（1904）年）と退任（昭和3（1928）年）を契機として、その収集や研究方法に変化が生じている。八田は北海道の野生動物研究とアイヌ文化の研究との関連性を認識し、鳥類剥製製造人の村田庄次郎と共にアイヌ民族資料

の動物学的分類法に基づく整理を進め、以後のアイヌ民族研究の素地を作った（沖野、2000）。

＜函館仮博物館・函館県博物館＞

仮博物館時代の列品分類は、禽、獣、蟲、魚、甲蟲、植物、種物類、見本雛形、古器物、北海道土人什器、木類、額面木材嵌入、押葉類、鉱物の14種類であった¹⁸。函館県博物館となってから収集されたアイヌ民族資料は、東京仮博物館が閉鎖された際に引き継がれた資料がまず主立ったコレクションの一つにある。博物館では列品分類を「歴史之部」、「植物之部」、「鉱物之部」、「工芸之部」、「動物之部」とし、アイヌ民族資料は、「歴史之部」の「太古（土器・石器類）、歴史今代」という部門に含まれることになった（関、1990）。

＜函館商業学校附属商品陳列場・水産陳列場＞

札幌博物館が札幌農学校に移管されたのと同じように、函館博物館も教育施設へとその管理が委ねられることになった。函館県博物館の資料は、この後庁立函館商業学校の附属商品陳列場、水産陳列場、函館尋常中学校（函館中部高等学校）の管理を経ているが、昭和中期までアイヌ民族資料の大きなコレクションが加わることはなかった。庁立函館尋常中学校に移管されてからは、資料の管理などが徹底されず、その間に散逸してしまったものもあるという（関、1990）。

2.3 開拓使施設のアイヌ民族資料収集の特色

本稿では紙幅の都合上、資料目録に残されたそれぞれの資料の細目を検討することが適わないため、主として以上で確認してきたような施設の設置意図や資料の収集意図、そしてその分類方法などから開拓使施設におけるアイヌ民族資料について考察を行いたい。

まず、明治政府がどのような意図を持ってウィーン万博出品物の『区外蝦夷朝鮮物品目録』のなかの北海道産物にアイヌ民族資料を含めたのか、ということについて検討したい。三浦（2001）が言うように、これは「いまだ「形式的領域」であった北海道が日本の「内国」であることを、万国博覧会という国際舞台で強調しようとする意図」（p.189）を示すことであり、海外に向けて北海道が日本国に属するものだというメッセージを発したものと考えられる。そして、その後の「日清・日露戦争の頃から表れてくる、博覧会での「アイヌ展示」をめぐる植民地主義的な性格はこの段階では明確ではない」（p.190）というのが三浦の見解である。確かに明確ではないが、異民族としてアイヌ民族を認識しつつ、かれらを内に取り込む視点というものがこの頃から胚胎してきていると見ることができよう。また、出品された資料の種類からわかるのは、アイヌ民族資料については、その時点での「ありのままの現在」を伝えるような、アイヌ民族が日常的に用いている道具類の「網羅的な資料収集」が行われたということである（加藤、2008）。

東京の北海道物産縦観所時代には、アイヌ民族資料は「土人之伎倆」を見るためのものであり、先進的技術やその生成物としての資料、そして資源が豊穡であることを示すような資料と並んで、北海道を魅力的な場所に見せ、移住を促進するという目的のためのものであった。そして、開拓使による博物館の設置意図において繰り返し述べられる文言に、北海道開拓政策の進展のために、人々に北海道の産物を縦覧させるというものがある。これは、このような施設が開設された当時既に進んでいた開拓政策をより一層進展させるには、「北海道の自然環境や産物に関する情報を一般に広く普及する必要」（関、1990、p.114）を開拓使が感じていたことによる。

このように、対外的には上述のように領土や支配といった要素が見え隠れするような意図、そして、対内的には、北海道移住促進のための参考品とする意図があった。明治初年の段階ではこれらの意図は矛盾することなく併存していたと言える。しかし、明治政府による「同化」政策が進展するにつれ、急激にアイヌ民族の物質文化は変容を遂げていくこととなる。明治10年代以降の施設の設置意図と資料のカテゴリーを見ると、勸業資料が重要視されるなかであって、札幌博物館設置の頃からアイヌ民族資料は「史伝の考徴に供する」ために収集され、「史伝」や「徴史」というカテゴリーに分類されるようになる。明治20年代半ば頃からは、新たに設立された商品陳列場や水産陳列場といった施設において勸業資料が扱われるようになる一方で、アイヌ民族資料は札幌においても函館においても、教育施設に所管されるようになり、学術研究の対象として振り分けられていった。

着目したいのは、札幌博物館時代に集められたアイヌ民族の物質文化に関わる網羅的な資料が、動物標本を主に扱う札幌農学校の管理となったという事実である。勸業という目的からははずれたために、勸業的な施設の列品にはならなかったわけだが¹⁹、ここには永原（2000）が南アフリカにおける博物館での先住民展示を例に指摘

する問題、すなわち先住民族資料が自然史博物館資料として扱われ、文化史博物館において植民者に関する資料が収集・展示されてきたという経緯との類似点をみることができよう。八田三郎が博物館のアイヌ民族資料について行った講演（八田、1926）では、博物館で陳列されている生活用具がアイヌ民族の実際の生活においてはもはや使用されていないということが強調されている。このことは、博物館とは「博物学的」で「歴史的」なものを収集・陳列するところであるという概念が、欧米の博物館の知識が伝わるにつれて定着していったことを示している。

3 川村アイヌ記念館—自文化の表象—

川村アイヌ記念館（現：川村カ子トアイヌ記念館）は、大正5（1916）年に川村カ子ト（カネト）アイヌの父、イタキシロマによって旭川近文コタンに開設された。川村家はイタキシロマの父モノクテの代から、旭川地方においてコタンコロクル（村おさ）の立場にあった家系であるが、記念館は設立以来、一族によって運営されてきた。記念館設立の背景には、明治33（1900）年に旭川に陸軍第七師団が札幌から移転されて以降、和人の移住が進み、明治43（1910）年に開校したアイヌ学校（上川第五尋常小学校）にも和人や外国人たちがアイヌ子弟を“見物”に訪れていたということがある。一方的に“見せ物”への視線で見て見られることに対してイタキシロマが講じた策は、博物館を作ってそこでアイヌ民族の文化や生活を取って見せるということであった。この場を民族やその文化を見せる場とすることによって、「アイヌ文化への正しい理解を求め」²⁰たのだった。

記念館の創設当初に収集・展示されていた資料は、明治39（1906）年に起こった火災によって消失したため現在には伝わっておらず、具体的にどのような資料がどのように陳列されていたのかは不明であるが、イタキシロマが記念館に展示した資料は、資料館として利用されていた彼自身のチセ（家）を始めとして、周囲に住む人々や自分の家族が使っていた生活用具や、かれらの歌や踊りであった。また、『秩父別開村三十周年記念誌』によると、明治34（1901）年の記述に「此の家の主人は川村某と称し、地方有数の名族にして（中略）他を迎えて什器を展覧せしむべかりしを」とあり、この当時すでに視察者にアイヌの伝統的な生活用具を見せていたことが明らかにされている²¹。さらに同時期には、同じく旭川地域において指導的役割を担っていた川上コヌサアイヌも「アイヌ文化参考館」という「観光施設」を運営していた²²。

旭川・近文においては、明治33（1900）年より昭和9（1934）に収束をみるまで、土地問題を争点として、3度にわたって争われた道庁や町議会とアイヌ民族側との一連のやり取りや、旧土人保護法の撤廃に向けた運動が起こった。日本各地で差別撤廃を掲げたマイノリティによる社会主義的な運動が活発化している時代にあつて、旭川では大正15（1926）年にアイヌ民族解放運動を展開した解平社が結成された。また、全道的な組織である北海道アイヌ協会も昭和5（1930）年に設立されている。記念館が設立されたのはイタキシロマによってであるが、昭和8（1933）年、記念館はアイヌ文化資料参考館としてカ子トによって構想され、新たなスタートをきる。彼は、旭川で本館の運営に本格的に携わるまでは、鉄道建設の測量技師として活躍し、道内に限らず各地を転々とする生活を送っていた。運動が広がりを見せ、カ子トが測量をしながら旭川アイヌ手工芸品組合設立などの民族復権運動において活動し始めたのが昭和10（1935）年前後のことであり、館が文化の保存・伝承や民族復権といった目的のために役割を果たし始めるという性格の変化も、ようやく萌芽を見せ始めた時期であると言える。

川村アイヌ記念館は、時代によって、その性格を少しずつ変えてきたと言えるだろう。特に旭川で給与地問題を争点として立ち上げられた運動のなかで、金倉（2006）が、「（土地返還運動のなかで、アイヌの指導者たちの共通の思いが、）カネトの場合、近文アイヌ民族博物館構想になった。アイヌ民族としての強烈な自己覚醒であった」（p.322）と述べているように、昭和初期のカ子トの時代には、記念館が民族文化の紐帯として意志的に利用されるようになってきている。同時に、設立以来、他の集団に自文化を見せるという視点とは切っても切り離せないものとして存在し続けてきたこともまた確かである。

ここでは設立の経緯と記念館を生み出した時代の社会的背景についてのみ言及し、そこから言えることについて述べるに留まったが、アイヌ民族自身が自文化表象を行ったという点で、明らかにこの施設は他の施設とは位置づけが異なる。しかし、これが完全に自由な自文化表象に委ねられているかと言えば、そうではないし、そも

そも自由な表象というものはありえず、外部からの「見たい」表象の要求に裏付けられている。

この節では、アイヌ民族自身が設立した館としてこの記念館を取り上げたが、今日まで続いている館のなかでこの時期に既に開設していたのは本館のみであるとはいえ、同じ地区で川上コヌサアイヌの館も運営されており、この後1920年代に観光と結びついた「自文化を見せる」活動は各地で盛んになっていく。

4 アイヌ民族をめぐる社会情勢と博物館における自文化／他文化の表象

明治初期から、北海道開拓と博覧会という目的においてアイヌ民族の生活用具が資料として収集・展示されることとなった経緯は第2節で見た通りである。北海道においてはとりわけ、勸業と開拓という目的のために博物館が人々に公開されてきたという経緯があり、アイヌ民族資料は開拓使という他者によってそのような文脈で利用された。国内外の博覧会については本稿で詳しく見ることはできなかったが、物質文化のみでなく、第五回勸業博覧会での「人類館事件」に代表されるように、その存在そのものが人種的興味や好奇の目に曝される機会が明治時代を通して増えていく。ただし、博覧会においてアイヌ民族資料が収集・展示された経緯やかれら自身が「展示された」ことをめぐっては、一方的にまなざされた観点にのみ着目するのではなく、かれらの主体的経験に積極的な意味を見出す先行研究もある（宮武（2010）など）。しかし、国内施設においても、海外博覧会においても、人々に対して領土や領民を誇示するための近代国民国家の語りとしてそれらが利用されてきたことは依然として重要なこととして受けとめねばならないし、恒常的な施設として設置された博物館は、当然ながらこのような博覧会のまなざしを引き継ぎ、定着させるものであったと言えるだろう。

北海道におけるアイヌ民族を取り巻くその他の社会的事象に目を向けると、明治20年代には全道に相次いでアイヌ学校が設立され、同化教育によってその文化や慣習が急速に失われていく。そのような時代にあつて、「滅び行く人種」という言説の流布とともに、博物館とはかれらの滅びつつある文化を保存するための場所であるという認識がアイヌ民族をまなざす立場の博物館関係者の間で共有されていく。博物館において資料を収集・展示する担い手が研究者となっていったことによって自明だが、学界でのそのような言説に共振して、博物館という場でもアイヌ民族を歴史的な存在として位置づけていく段階に入るのである。

明治中期以降に現在・未来という視点の強い産業博物館と過去への視点の強い歴史や人類学の博物館が徐々に分化してくなかで、アイヌ民族資料は次第に人類学・民族学という観点において扱われる比重が大きくなっていったが、同時に考えなくてはならないのは、観光や見せ物といった商業的な意味合いにおいてもアイヌ民族資料が博物館で扱われるようになってきたということである。

大正7（1918）年の8月に札幌区中島公園を中心に開催された「開道五十年記念北海道博覧会」で設置された陳列館の一つ「拓殖教育衛生館」は、博覧会閉幕後に「拓殖館」という名称の常設の展示施設となった。開道五十年とは、開拓使が設置された明治2（1869）年を「起点」としての五十年であり、山田（2001）は、この博覧会の重要な特色として「開道五十年を記念する」という歴史認識との結びつきを指摘し、それまでこの認識が社会的に広く共有されていたわけではなく、この博覧会を始めとした一連の事業と新聞での報道がこれらの認識を広く一般に広めることに与したことに注目している。この陳列場においては、全体として政府側、開拓使側の殖民や土木事業といった拓殖事業の展開を主題とした陳列のなかにアイヌ民族資料が含まれていたとともに、会場では歌や踊りの公演や、彫刻や刺繍の実演販売が行われていた（山田、2001）。

同じ大正期に、アイヌ自身が民族復権運動を展開し始めるその時期に旭川で川村アイヌ記念館が誕生した。まさに奪われたものを取り戻す土地返還運動に相俟って、誤って伝えられている自分たちの文化を正しく理解させるという目的において設立されたが、ここでは文化の保存と観光という相互に葛藤のある問題に直面することになる。支配的な言説への抵抗の場と成り得たかと言えば、まなざされることを前提としたうえでの自己表象であり、概念としてのオートエスノグラフィー（autoethnography）、すなわち、他者による表象への応答またはそれと対話するかたちで自文化を描く作業が行われていると言える²³。また、自文化表象を行い得た主体としての川村カ子トという人物を考えるに、かれはアイヌとしての民族的アイデンティティーを深く自覚し土地返還運動などに積極的に身を投じ、アイヌ民族の代表として自分たちについて語った。たとえ自民族の文化であっても文化を語ることの代表性の問題は現在においても「文化」を扱う博物館においては問題となっている視点であるこ

とは注記しておかなくてはならない²⁴。

5 おわりに

博物館は、異文化を異文化と同定する言説や表象と人々とのあいだの接点として機能する一つのメディアであり、本稿では明治から昭和初期の北海道の博物館が社会との関わりの中でどのように変遷してきたのかをアイヌ民族資料の扱いを通して見てきた。しかし、博物館が社会とどのように関わっているのかということを知るには、当時の博物館の来館者をはじめ、そこに関わる人々が展示をどう捉えたのか、どのようにアイヌ民族に対する認識を形成させていったのか、ということについて調査することが不可欠であろう。また、本稿では主として北海道での博物館活動に限定して結論を述べたが、同時代の北海道以外の状況を考察しないで以上のような結論を述べることは本来ならばできないことであり、今後の課題としたい。

さらに、和人が北海道移住を進め、アイヌ民族を対象とした調査や研究が活発化するよりも前に、外国人研究者による資料収集や研究が進められていたことも注目し値する。また、本稿で扱った時代以降、昭和中期にはまた異なった目的や意図を持った博物館が誕生し始め、殊に北海道においては地域文化や郷土文化の創出という文脈で博物館の存在が求められることとなる。このようななかであって、アイヌ民族がどのように扱われるようになるのか、そしてそのことの持つ意義は別稿で論じることとしたい。

参考文献

- 沖野慎二（1999, 2000, 2001）「北大附属博物館所蔵アイヌ民族資料（上）（中）（下）」『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要』5:1-19, 6:1-17, 7:1-19.
- 加藤克（2008）「北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について」『北大植物園研究紀要』第8号, 35-91.
- 金倉義慧（2006）『旭川・アイヌ民族の近現代史』高文研
- 川村アイヌ記念館（1996）『ペニウンクル チャシ 川村アイヌ記念館の歴史』
- 小松原秀信（2004）「博物館の「異文化表象」に関する諸問題についてー民族学博物館の可能性を模索するための試論ー」『A Journal of Museological Studies (MOUSEION)』No.50, 15-21.
- 市立函館博物館（2002）『はこだて博物史ー街と歩んだ函館博物館の120年ー』
- 関秀志、中田幹雄、千代肇（1990）「明治期における北海道の博物館（1）」『北海道開拓記念館調査報告』第29号, 113-139.
- 関秀志（1991）「明治期における北海道の博物館（2）」『北海道開拓記念館調査報告』第30号, 91-118.
- 関秀志（1975）「明治初期～中期における北海道の博物館ー札幌を中心にー」『北海道開拓記念館研究年報』第4号, 47-65.
- 千代肇（1979）「明治の函館博物館」日本歴史学会編『日本歴史』1979年11月号 第378号、吉川弘文館、90-97.
- 永原陽子（2000）「博物館のなかの先住民」『歴史評論』No.601, 60-69.
- 八田三郎（1926）「アイヌの生活と博物館のアイヌ品陳列棚」『財団法人啓明会第十八回講演集』31-41.
- 三浦泰之（2001）「ウィーン万国博覧会と開拓使・北海道」『北海道開拓記念館研究紀要』第29号, 177-206.
- 宮武公夫（2010）『海を渡ったアイヌー先住民展示と二つの博覧会』岩波書店
- 山田伸一（2000）「拓殖館のアイヌ民族資料についての覚書」『北海道開拓記念館研究紀要』第28号、179-198.
- Boast, R. (2011) Neocolonial collaboration: Museum as Contact Zone Revisited, *Museum Anthropology*, Vol.34, Iss.1, 56-70

註

- 1 北海道所蔵旧記2261 開拓使「教師報文録」沓（以下、旧記簿書の記述は関（1975, 1990, 1991）より再引用。）
- 2 『開拓使事業報告』第貳編、明治18年（昭和58年復刻版）、北海道出版企画センター、p.479.
- 3 『開拓使日誌』『仮博物場設立の義上申』明治8年3月29日付、p.1152.（関（1990）より再引用。）
- 4 北海道立文書館簿書7263、農商務省北海道事業管理局「札幌博物場、札幌牧羊場、札幌育種場引継書類」
- 5 北海道立文書館簿書7263、農商務省北海道事業管理局「札幌博物場ノ義二付何」（博物局から農商務卿へ宛てたもの、1882年）
- 6 『北海道帝国大学一覽 自大正十一年至大正十二年』（加藤（2008）より再引用。）
- 7 『札幌農学校一覽 從明治二十年至二十一年』（加藤（2008）より再引用。）

- 8 『北海道現行布令便覧』上巻、明治31年8月、pp.1120-1123. (関 (1991) より再引用。)
- 9 『札幌農学校一覧 従明治28年至明治30年』(1897年、p.163。沖野 (1999) より再引用。)
- 10 「博物館縦覧細則」、『東北帝国大学農科大学一覧 自明治四十二年至明治四十三年』(北海道大学附属図書館蔵) (関 (1991) より再引用。)
- 11 北海道立文書館簿書2661 函館支庁勸業係「函館仮博物場並公園地書類 従明治十一年一月至十二月 十二年マテ」
- 12 『明治五年開拓使公文録 八 外事之部』北海道立文書館所蔵簿書5495-125。(三浦 (2001) より再引用。)
- 13 前掲『開拓使事業報告』第貳編
- 14 北海道立文書館簿書5816 開拓使東京出張所「開拓使公文録 本庁 明治八年」
- 15 北海道所蔵簿書8532 北海道事業管理局札幌農業事務所「博物場農学校轉轄書類」
- 16 札幌農学校簿書『局長上申本局稟議録』(明治18年、北海道大学附属図書館蔵)
- 17 村田庄次郎編『札幌博物館案内』維新堂 (明治43年)
- 18 北海道立文書館簿書7189-2 函館支庁『開拓使事業報告書一乾』「函館仮博物場」
- 19 商品陳列場に一部収蔵はされており、これらは後述の拓殖館が独立した際に移管になった可能性を山田 (2000) は指摘している。
- 20 川村カ子トアイヌ記念館パンフレット (2011年7月現在)
- 21 金倉、2006、p.9.
- 22 川村アイヌ記念館と「競合していた」が、1950年代に閉鎖 (川村アイヌ記念館、1996)。
- 23 Boast, R. (2011)
- 24 吉田憲司 (2007) 「異文化と自文化の展示をめぐる新たな動き・2006」大阪人権博物館『博物館の展示表象—差別・異文化・地域』pp.13-58.